

編集者 序

爽やかな春風と初夏の日差しを浴びながら、ワクワクする気持ちでこの序文を書いております。この超実践マニュアルシリーズも、ほとんどのモダリティの解説書を発刊し、いよいよ第2段階に入ってまいりました。

診療放射線技師が臨床研究をする場合、従来はモダリティ別に発表・研究していることが一般的でした。これは、臨床業務においてローテーションはあるものの、特定のモダリティに専門性において、勉強や研究を行ってこられたためと考えます。この専門性は非常に重要で、広く浅く医用全般を知る必要はあるのですが、特にプロフェッションとして1つのモダリティに特化して深い知識を習得することが、チーム医療全体の向上に連携していると考えます。そのために、専門認定技師の制度も確立してきているものと確信しております。

しかし放射線医学雑誌を見てもわかるように、多くは臓器別にセクションが分かれています。これは、各臓器の画像診断においては多角的な検査情報、医療情報から画像診断に導いていく必要があるためです。診療放射線技師も各検査の撮像技術、読影技術を論じる場合に、1つの臓器器官に対してさまざまなモダリティ検査の得意・不得意を認識し、医療進歩に準じて常に新しい知識を習得しておくことが必要となります。

これがマルチモダリティシンポジウム Versus の根幹ではありますが、本書において、その主旨に合致した新しい臓器別シリーズを始めることになりました。その第1弾が、本書の「肝胆脾臓」の上腹部です。上腹部における各モダリティの撮像技術や各病変の画像の見え方、侵襲度、安全性を含めた長所短所も記載していますので、是非一読いただき、自分の専門とするモダリ

ティヘフィードバックいただければ幸いです。

また私の願いとして、これからの診療放射線技師は第2の専門性を持つ必要があると考えています。すなわち、専門モダリティと専門臓器を持つということです。第2の専門性を確立する上においても本書をご活用いただければ嬉しく思います。

最後に、本書の出版に絶大なるご協力を頂いた、医療科学社の斎藤聖之氏ならびに代表取締役の古谷敷信一氏に深く感謝いたします。

2018年5月吉日
編者を代表して
小倉 明夫